

たかさご史話 48 高砂を旅した人々

江戸時代といえば、一生に一度のお伊勢参りくらいしか旅に出ることはない、といったイメージがあった。もちろん、今に較べれば当時の旅がたいへんだったのは確かだが、それでも案外多くの人が旅に出ていた。

その証拠となるたくさん紀行文。編さん中の『高砂市史』近世史料編にも紀行文を収録して、江戸時代の旅人の「高砂体験」を紹介する予定である。ということで、私も旅に出て各地に残る紀行文を集めてきたのだった。

旅といってもさまざま。物見遊山、今でいう観光旅行が一番多いが、遠山の金さんの父上で後に長崎奉行となる遠山景晋とあやまかげみちなど武士の公務の旅、小林一茶・上田秋成・大田南畝おあたなんぼといった当時一流の文化人の地元の名士や文人との交流の旅もあれば、托鉢たくはつや修行のつらい旅もあった。長崎出島のオランダ人も、外国渡りの象

もやってきた。有馬温泉での湯治の行き帰り、山陽道の往來や船での讃岐の金毘羅参りの途中に立ち寄った人も多い。というのは、高砂近辺には有名な名所があったからである。江戸の漢学者志賀理齋によれば、「石の宝殿・曾祢のまつ・高砂・尾上、是を四ヶの名跡」といい、多くの人はこの四つをセットにして見物した。海岸部の松原の美しさはその背景にあり、高砂の町はきれいで繁華だが風情がないという意見もあった。名所には茶屋や土産物屋、高砂・豆崎には宿屋が立ち並んでいた。江戸時代の高砂地域は観光のメッカでもあったのである。

紀行文には書く人の個性があらわれる。そして地元の人々が思いもつかないような視点が旅人にはある。ひたすら和歌・俳諧などを詠んで古代のロマンにうっとりする文学好きもあれば、川の渡し賃いくらと記録する実際家もあ

り、他地域と異なる盆風俗などを記す鋭い観察者もいる。夜遅く到着して宿をかしてもらえず疲れはてた遠方からの客人、法外な飲物代に憤る尊皇の志士もあれば、はるばるヨーロッパから来て誠実な相撲取との心温まる交際を描き残したシーボルトのような人もいる。人は何を求めて旅をするのか。それは人それぞれだが、こうした心の交流のある紀行文を読むとほっとする。

(市中編さん専門委員

中川すがね)



橘南谿『東西遊記』より「曾根松」
(国立国会図書館所蔵)